

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察（２）

渡邊 理伊知

要旨 埼玉県内を中心に、主に 7 世紀～ 11 世紀頃にかけての東北・関東地方における主な遺跡から出土した鉄鏃を出土状況から検討を試みた。その結果、ほとんどが竪穴住居跡からの出土であり、出土本数は 1 本のみの出土という状況であった。

少量しか鉄鏃が出土しない遺跡からも尖根式・広根式・雁股式がそれぞれ出土している状況にあり、特徴的な傾向は見られない。これらは、原則として尖根式は武器、広根式は狩猟などの扱いが主であるが、集落内においてはそれぞれ他の目的にも使いまわしされていたためと考えられる。

一方で、鉄鏃は国家政策によって出土量が増減する可能性が想定でき、時期ごとの出土量と歴史的な背景について考察を試みた。

はじめに

前回、埼玉県内の遺跡から出土した鉄鏃を形式ごとに分類し、それぞれの出土量から比率をあげ、古代社会において武器としての鉄鏃が最も多く消費されたと考えられる城柵遺跡との比較を行った。その結果、城柵遺跡においては尖根式の割合が圧倒的であるという状況が明らかとなった（渡邊 2016）。

これは尖根式が主に征矢としての使用されたためであり、それ以外の鉄鏃は武器以外が主目的で使用されていたことのあらわれであると想定した。

また前稿において、郡単位で形式ごとの出土比率を示したが、具体的な検討を行うことができず、郡境の区分も含めて曖昧になってしまった。

そこで本稿では、郡単位での区分は行わず、遺跡ごとの傾向から改めて検討を行うこととする。

比較対象として、東北・関東地方等の遺跡をいくつかとりあげ、出土した鉄鏃の性格や傾向から使用実態や歴史的背景との関わりについて考察する。

鉄鏃の分類は前稿でおこなったものに依ったが、本稿では大別の尖根式、広根式、雁股式、無

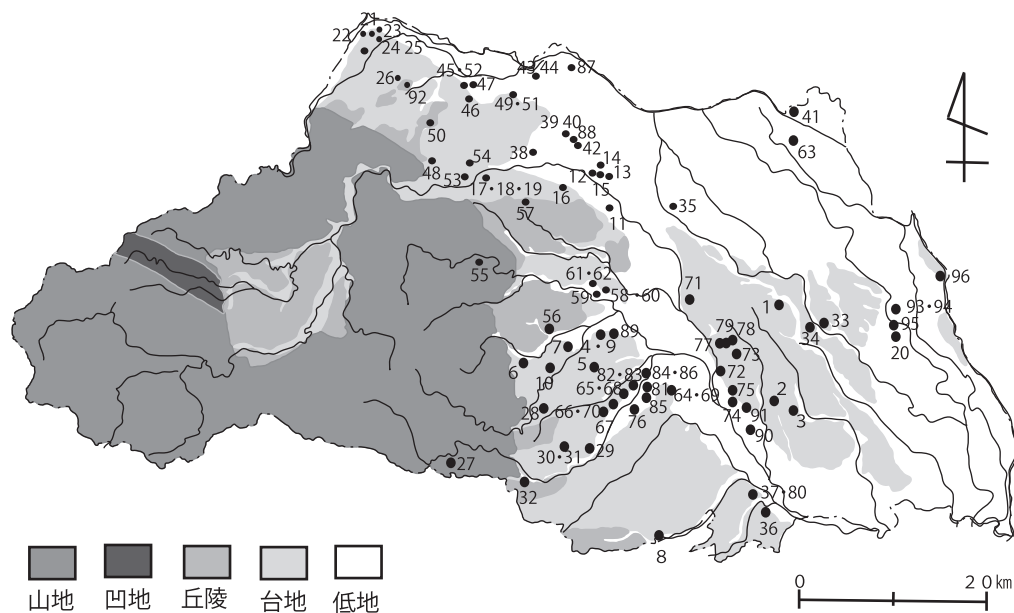
頸式を用いている（渡邊 2016）。

1. 出土状況と出土量

今回対象とした埼玉県内において、古墳の副葬品を除いて、主に 7 世紀～ 11 世紀頃の時期に鉄鏃が出土した遺跡は 96 遺跡・341 遺構であり、その他に表土・検出面・トレンチ等の出土遺物が含まれる。資料の点数は 474 点となった（第 1 図）（第 1 表）（註 1）。

埼玉県内において、7 世紀から 11 世紀にかけての時期に鉄鏃が出土した遺構の 73% は竪穴住居跡であった。出土点数の割合は、1 本が 83%、2 本～3 本が 15%、4 本～9 本が 2%、それ以上の量出土した事例は 0% であった。出土割合としては 1 本のみの出土が圧倒的に高い傾向にあった。

竪穴住居跡から 1 本のみで出土した鉄鏃の鏃身形式ごとの割合としては、尖根式が 29%、広根式が 23%、雁股式が 9%、無頸式が 4%、鏃身不明が 35% であり、尖根式と広根式の比率には、形式による大きな差は認められなかった。



第1図 埼玉県内の鉄鏃出土遺跡

次に竪穴住居跡以外の遺構からの出土は、土坑からの出土が5%、井戸跡からの出土が1%以下、溝跡・河川跡からの出土が5%、柱穴・ピットからの出土が2%となり、その他（表土・検出面等）からの出土状況が15%となる。

しかし、複数点出土している遺構についても、破片資料が多いため、1本の鉄鏃が割れて出土している可能性も考えられることから、必ずしも実態を反映しているとはいえない。

2. 出土状況からの傾向

(1) 鉄鏃の保管状況

集成結果から鉄鏃は基本的には竪穴住居跡に保管されていた可能性を想定することができるが、まとまった量の出土事例は少なく、『養老律令』「軍防令第七備戎具條」に記されている「征箭五十隻」のような一括の状態で保管されていた可能性を想定できる事例は、埼玉県内の遺跡からはみられなかった。わずかに可能性を想起させる出土事例としては、人間市の高倉寺前遺跡において鏃箭式の鉄鏃が竪穴住居跡の床面から4本出土している事例があった。

他地域でもまとまった出土事例は少なく、東

京都八王子市の船田遺跡で竪穴住居跡から32本の鉄鏃が出土している事例や静岡県富士市の東平遺跡で焼失建物跡から鉄鏃が30点出土している事例がみられる程度である。

船田遺跡では、9世紀後半の竪穴住居跡から32本の鉄鏃がまとめて出土している（服部1998、松崎2005）。服部敬史はこの一括出土の鉄鏃を「終末期の律令制軍防令に規定されている事例とみることを可能にしている。」としている（服部1998）。

東平遺跡では、8世紀後葉から9世紀中葉の時期に位置づけられている焼失建物跡の125号竪穴住居跡から多量の遺物が出土している。鉄製品は、鉄鏃が30点、刀子が3点、手斧が1点、紡錘車が1点、鉄鎌が1点出土している。

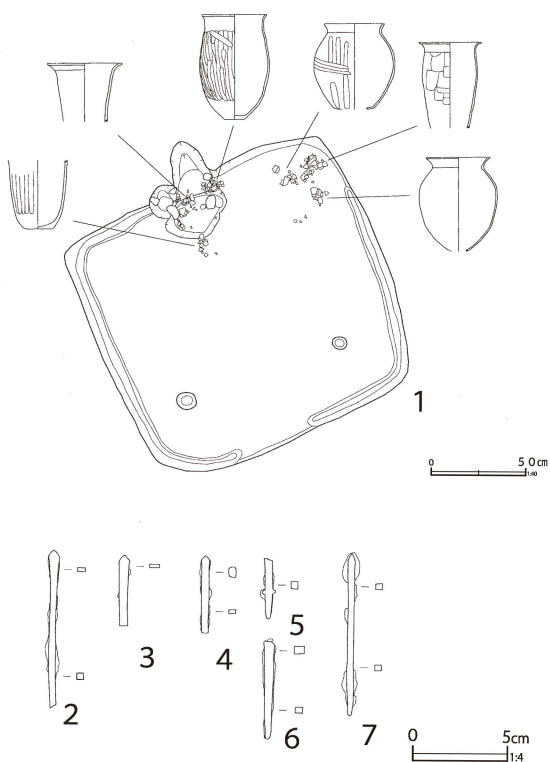
特筆すべきは焼失建物跡から鉄鏃がまとめて出土している点である。調査報告書で図示されている点数は19点であり、広根式は飛燕Ⅰ式が1点、三角形Ⅰ式が1点の計2点、尖根式は鏃箭Ⅰ式が16点、鏃身不明が1点であった（平林・及川・志村1982）。竪穴住居跡における鉄製品の所有形態を示す一例といえるだろう。

だがこのような出土状況は稀であり、松村恵司

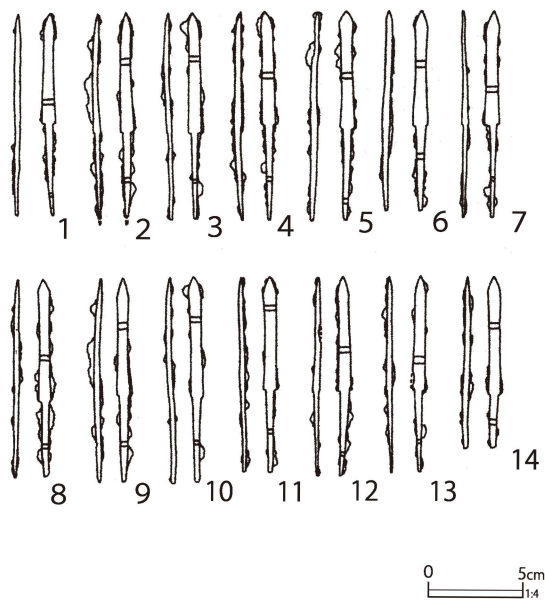
第1表 鉄鏃出土遺跡一覧

	遺跡名	尖根	広根	雁股	無頸	不明	計
1	大山	1	2	0	0	0	3
2	氷川神社東	2	2	9	0	4	17
3	下野田稲荷原	1	0	0	0	0	1
4	番匠・道下	0	1	0	0	0	1
5	若葉台	1	2	0	0	3	6
6	伴六	1	1	0	0	1	3
7	稲荷前	1	1	1	0	0	3
8	東の上	17	10	0	1	43	71
9	宮町(坂戸市)	2	0	0	0	0	2
10	まま上	0	0	1	0	0	1
11	下田町	0	0	0	1	3	4
12	宮町(熊谷市)	1	0	0	0	1	2
13	古宮	1	1	0	0	0	2
14	北島	1	2	0	0	3	6
15	諏訪木	1	0	1	0	0	2
16	宮下	1	0	0	0	0	1
17	如意	6	2	1	2	8	19
18	如意南	0	2	0	0	0	2
19	如意Ⅲ	3	0	1	0	7	11
20	八木崎	2	4	1	0	4	11
21	将監塚・古井戸	7	0	1	0	5	13
22	皂樹原・檜下	4	1	0	1	3	9
23	中堀	5	8	3	0	2	18
24	地神	1	0	0	0	1	2
25	塔頭	1	0	0	0	0	1
26	今井条里	0	1	0	0	0	1
27	横道下	0	0	0	0	1	1
28	宮ノ後	0	0	0	0	1	1
29	小山ノ上	0	1	0	0	0	1
30	張摩久保	1	0	0	0	0	1
31	芳ヶ谷	1	0	0	0	1	2
32	道間	0	1	0	0	2	3
33	椿山	1	10	10	0	0	21
34	荒川附	10	2	1	4	11	28
35	築道下	1	3	0	0	3	7
36	宮台・宮原	1	1	0	0	0	2
37	中道・中道下	1	0	0	0	1	2
38	下辻	0	0	0	0	1	1
39	幡羅	3	2	0	0	0	5
40	下郷・北下郷	0	2	0	0	0	2
41	飯積	1	0	0	1	2	4
42	在家	0	0	0	0	1	1
43	飯塚北	4	0	1	0	5	10
44	飯塚北Ⅱ	4	3	1	0	3	11
45	宮西	0	1	1	0	0	2
46	熊野	6	8	0	1	8	23
47	新田	0	0	0	0	1	1
48	中山	0	1	0	0	0	1

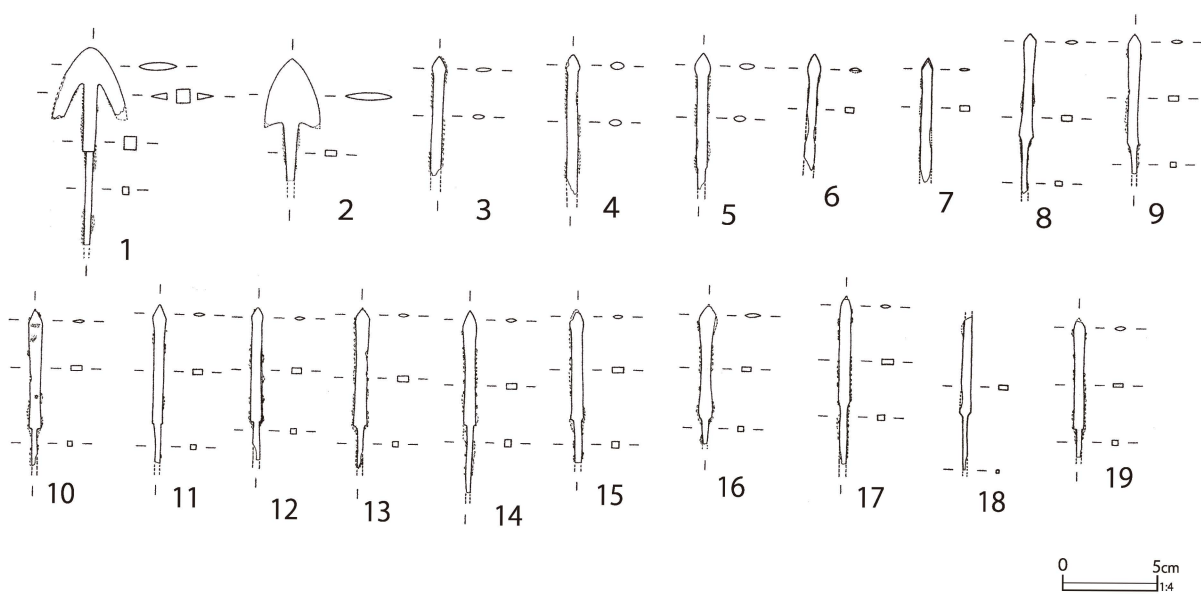
	遺跡名	尖根	広根	雁股	無頸	不明	計
49	皿沼西	0	1	0	0	5	6
50	上宿・台	1	1	0	0	0	2
51	上敷免	1	0	0	0	1	2
52	大寄	5	5	2	0	2	14
53	台耕地	1	4	0	0	10	15
54	北坂	0	1	0	0	0	1
55	耕地	0	0	0	0	1	1
56	天神台東	0	0	0	0	1	1
57	谷ツ	0	1	0	0	0	1
58	銭塚	3	1	0	0	0	4
59	大西	0	0	0	1	0	1
60	反町	1	0	3	0	0	4
61	山王裏	0	0	1	0	0	1
62	西浦	0	1	0	0	0	1
63	花崎	0	0	0	0	1	1
64	弁天西	0	0	0	1	0	1
65	霞ヶ関	0	1	0	0	0	1
66	東下川原	0	3	0	0	1	4
67	八幡前・若宮	0	2	1	0	3	6
68	龍光第4	0	0	1	0	0	1
69	小仙波	2	0	0	0	1	3
70	牛東北	0	0	0	0	1	1
71	宮岡	0	1	0	0	0	1
72	下宿	0	2	0	0	0	2
73	宮ノ脇	1	2	0	0	0	3
74	根切C-1	1	2	0	0	1	4
75	馬宮	0	0	0	0	3	3
76	高倉寺前	6	0	0	0	0	6
77	領家・宮下	3	0	2	0	4	9
78	尾山台	0	2	0	0	0	2
79	氷川	0	0	1	0	0	1
80	西久保・宮山	1	0	0	0	0	1
81	揚櫓木	0	0	2	0	0	2
82	今宿	1	3	0	0	0	4
83	霞ヶ丘	0	1	0	0	0	1
84	城ノ越	0	1	0	0	0	1
85	稲荷上	0	0	0	0	1	1
86	森ノ上	0	0	0	0	1	1
87	王子西	0	0	1	0	0	1
88	一本木前	1	0	1	0	0	2
89	勝呂廃寺	0	1	0	0	0	1
90	八王子浅間神社	1	0	0	0	0	1
91	白鍬宮腰	0	1	0	0	0	1
92	大久保山	0	3	0	0	0	3
93	小淵山下	0	1	0	0	0	1
94	小淵山下北	0	2	0	0	0	2
95	浜川戸	1	2	1	0	0	4
96	貝の内	0	1	1	0	0	2
合計		124	121	50	13	166	474



第2図 高倉寺前遺跡
第1号住居跡 出土鉄鏃



第3図 船田遺跡 A-7号住居跡 出土鉄鏃



第4図 東平遺跡 125号住居跡 出土鉄鏃

が焼失住居跡出土の一括遺物から竪穴住居跡の所有物を検討しているが、焼失住居跡からの出土事例も少ない（松村 1991）。

出土事例こそ少ないが、尖根式の鉄鏃がまとまって出土することもあることから、征矢をある程度の量まとめて所有することも有ったものと思われる。

このようなまとまった出土例と「軍防令第七備戎具條」との関連については、今後の検討課題としていきたい。

また、尖根式・広根式・雁股式の形式によって出土状況に大きな違いは認められなかったことから、竪穴住居跡から出土する少量の鉄鏃は、主に狩猟用など日常生活において使用する目的で所有されていたものと思われる。

種石悠は、関東地方では古墳時代中・後期に平根式の鉄鏃が増加する現象は害獣の駆除や狩猟などが背景にあるとしている。また、甲信地方では鉄鏃に占める平根式の割合が高く、これは関東地方に類似するとしており、古墳時代中・後期における平根式の鉄鏃を害獣の駆除や狩猟と関連付けて検討している（種石 2014）。

広根式は9世紀前半に増加し、10世紀前半に減少するまでは安定した出土量がみられ、一定の需要があったとみられる。

原則として広根式は狩猟、尖根式は武器などの扱いが主であると思われるが、集落内においてはそれぞれ他の目的にも使いまわしされていたため、それぞれの形式の鉄鏃が少量で出土していると考えられる。

尖根式の鉄鏃についても、軍団兵士に関わって集落内にもたらされていたと思われる。

また遺跡によっては出土する鉄鏃の多くが同一の形式である場合と複数の形式が混在してみられる場合がある。これはそれぞれの遺跡において、鉄鏃を所有している意味が異なるためと考えられる。

松村恵司は鉄器が遺存する可能性については偶

然性に左右されるものであると指摘し、出土量から当時の流通量を検討することは困難であるとしている（松村 1991）。しかし、遺跡ごとに出土する鉄鏃の形式に偏りがあるということは偶然性という視点からみても、その遺跡において多く消費されていた鉄鏃の形式を示すといえよう。

以上のような出土状況の傾向を踏まえ、次に雁股式の鉄鏃について検討を行う。

（2）雁股式鉄鏃について

前稿において、主に尖根式は「征矢」、広根式は「野矢」として位置づけたうえで検討を進めたが、雁股式については、性格付けを行えなかった。そこで、改めて雁股式についてみる。

埼玉県内で出土している雁股鏃は富田和夫によって集成されている（富田 2009）。雁股式の鉄鏃については、氷川神社東遺跡や椿山遺跡においては、集中して出土する傾向が得られたが、それ以外の遺跡において、集中して出土する傾向は見られなかった。

氷川神社東遺跡は、さいたま市（旧大宮市）に所在し、足立郡に属する。遺跡の性格としては、近隣に武蔵国一宮氷川神社が所在する立地、口琴、金銅製仏像、「上寺」記載墨書土器、灯明皿と考えられる油付着土器の出土例などから、氷川神社と関わる宗教的・祭祀的な性格が想定される。

出土した鉄鏃の時期は9世紀後半から10世紀後半の時期に位置づけられる（第13図）。

鉄滓やその他の鉄製品と共伴して出土する点や小鍛冶炉が伴う遺構から出土する点、出土した鉄鏃の全てが欠損している点や2次的な変形を受けているものがある点から、これらの鉄鏃は修理か再資源化（リサイクル）の目的で持ち込まれた可能性が想定される（註2）。氷川神社やそれに関連すると考えられる仏教施設による儀式や祭祀との関わりによるものの可能性も想定でき、それに伴う鍛冶施設に持ち込まれていた鉄鏃である可能性も考えられる。

雁股式の鉄鏃が出土した遺構の中で最も多かったのは竪穴住居跡であり 70%であった。これは、尖根式や広根式と大差ない。特徴的な出土状況としては、東松山市の反町遺跡や熊谷市の諏訪木遺跡において河川祭祀に用いられた可能性が想定できる出土状況が確認されたが、それ以外に祭祀に伴う可能性を想定できる出土例は認められなかった。

氷川神社東遺跡においても、遺跡の性格から祭祀に関わるものの可能性もあり得るが、直接的に祭祀に用いられたものではない。

このような出土状況からは雁股式鉄鏃を明確に祭祀目的の鉄鏃であるとは言い切れない。

あくまでも祭祀目的で使用されることも有るが、祭祀前提の形式であるということにはならないものとする。

また、後述するように 9 世紀前半頃に尖根式が減少していくと、比例するように広根式と雁股式の出土量が増加し、9 世紀後半頃には出土量が逆転するという状況がみられるようになる。特に雁股式は 9 世紀前半に激増する様子がみられた。

雁股式の鉄鏃は大きさや形状の差が大きく、作りが精緻なものと粗雑なものが認められる（第 5 図）。

関義則は氷川神社東遺跡出土の鉄鏃の検討と『男衾三郎絵詞』に描かれている鉄鏃から「例外的に『雁股鏃が征矢として用いられることがあった』のではなく、雁股鏃の中に、固有の『征矢として用いられたものがあった』ということである。」としている（関 1993）。

9 世紀前半頃に尖根式が減少していくと、雁股式が増加することから、この指摘のように尖根式の役割を受け継いだ可能性も考えられる。

精緻なものと粗雑なものの違いなどのような、つくりの違いが用途の違いを表すものであるかは、慎重な検討を要する。今後の検討課題としておきたい。

3. 鉄鏃と歴史的背景

時期による変遷から鉄鏃、特に尖根式の征矢は国家政策による影響が反映されやすい傾向にあると考えられる。

東北地方に配置された城柵遺跡については、以前集成を行っている（渡邊 2015）。その中で秋田県秋田市の秋田城跡が全城柵遺跡で最大の出土量であった。

これは陸奥国においては、宮城県多賀城市の多賀城跡の他に、ある程度の鉄鏃が出土している大崎市の名生館官衙遺跡や加美郡加美町の東山遺跡・壇の越遺跡、石巻市の桃生城跡や栗原市の伊治城跡などへ兵力が分散して配置されていたためであり、それに対して出羽国の兵力は、秋田城跡に集中して配置されていた可能性をみることができる。

また、多賀城跡や伊治城跡といった三十八年戦争（註 3）の舞台ともなった城柵遺跡においては 8 世紀後半～9 世紀初頭の時期に鉄鏃の出土が増加する傾向がみられまた、秋田城跡では元慶の乱の時期にあたる 9 世紀後半に鉄鏃の出土量が増加する傾向がみられた（渡邊 2015）。

茨城県石岡市に所在する鹿の子 C 遺跡は常陸国府に関わる官営の工房とされる。

川合正一は、鹿の子 C 遺跡について「操業の開始が 8 世紀後葉で、中央の官営工房の生産体制を導入したその在り方などから、鹿の子 C 遺跡は蝦夷征討という非常時における武器・武具類の緊急量産体制を敷いた特殊な官営工房」であるとしている（川合 2005）。

鹿の子 C 遺跡の解釈については、そのほかに黒澤彰哉が瓦の検討から造寺活動に関わる可能性や弘仁九年（818）の大地震に伴う復興事業との関わりを想定している（黒澤 2013）。

しかしながら、鹿の子 C 遺跡が征夷戦争のための兵站施設として果たした役割は大きいものだろうといえよう。

このように戦などによって鉄鏃の需要が高まっ

ていた遺跡において鉄鏃、特に尖根式の出土量が増加する傾向がみられることがある。

増加とは逆に減少するという事象についてもなんらかの理由があるものと考えられる。

そこで出土量の増減と国家政策との関わりが想定できそうな事例について考察を試みる。

(1) 評関連遺跡と鉄鏃

熊野遺跡は深谷市(旧岡部町)に所在し、榛沢郡(評)家に関連する遺跡とされている。700軒を超える竪穴住居跡や100棟を超える掘立柱建物跡、道路上遺構、石組井戸跡、連房式鍛冶工房跡が検出され、遺物も唐三彩の唐枕、円面硯、帯金具、陶製仏殿、置きカマドなどの遺物が出土している。

また隣接する中宿遺跡からは20棟の総柱掘立柱建物跡が規則的に配置されており、榛沢郡家の正倉と推定される。

鉄鏃の出土状況としては、竪穴住居跡からの出土が多く、ほとんどが1点のみの出土である。時期は7世紀後半から10世紀初頭頃までみられる。最も出土時期が多いのは7世紀末頃であった(第6図)。

同様の事例として、千葉県我孫子市の日秀西遺跡とその周辺遺跡(下総国相馬評)においても7世紀後半頃まで鉄鏃の出土量が多い(第7図)(清藤・上野1980)。

軍団の成立以前は、評が兵士の徴発や編成を行い、評督などが軍を率いていたと考えられている。

『日本書紀』天武天皇十四年(685)十一月丙午(四日)の詔によると、

詔四方國曰。大角。小角。鼓吹。幡旗。及弩拋之類。不應存私家。咸收于郡家。

とあり、大角、小角、鼓吹、幡旗といった軍隊指揮の用具と弩などの大型武器は私家に置かず、郡家(この段階では評)に収めることを命じている。

これはこの段階においては、軍事指揮権が評に置かれていたことを推定させるといえ、後に軍団

制が確立したことによって評から軍事権が分離したことになる。

池田敏宏・津野仁は日秀西遺跡の鉄鏃の出土量が多い状況について「7世紀後半は、それ以前に私有されていた武器が郡家に収公される時期である。相馬評家に武器が集約された結果を反映すると考える。」としている(池田・津野2011)。熊野遺跡も同様の意味合いから捉えることができよう。

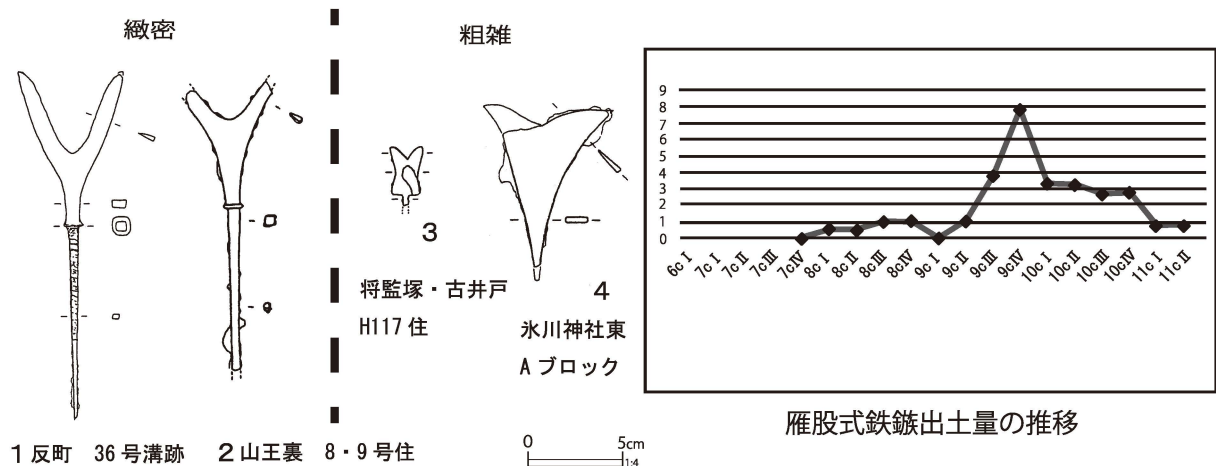
他に群馬県太田市の西野原遺跡は、南方約2kmの地点に上野国新田郡(評)家跡として知られる天良七堂遺跡が位置し、新田郡(評)家関連の鍛冶工房施設と推定されている。なかでも7世紀第4四半期とされる117号住居跡(鍛冶工房)からは鉄鏃が20本近く出土している(第8図)(註4)(谷藤・小林・田村2010)。

また、福岡県小郡市の小郡官衙遺跡(筑後国御原評)においては、BE地区溝815上層埋土から2次被熱を受けた鉄鏃がまとまって出土している。実数は216本以上であり、300点前後になるとみられるという(小嶋2014a)。

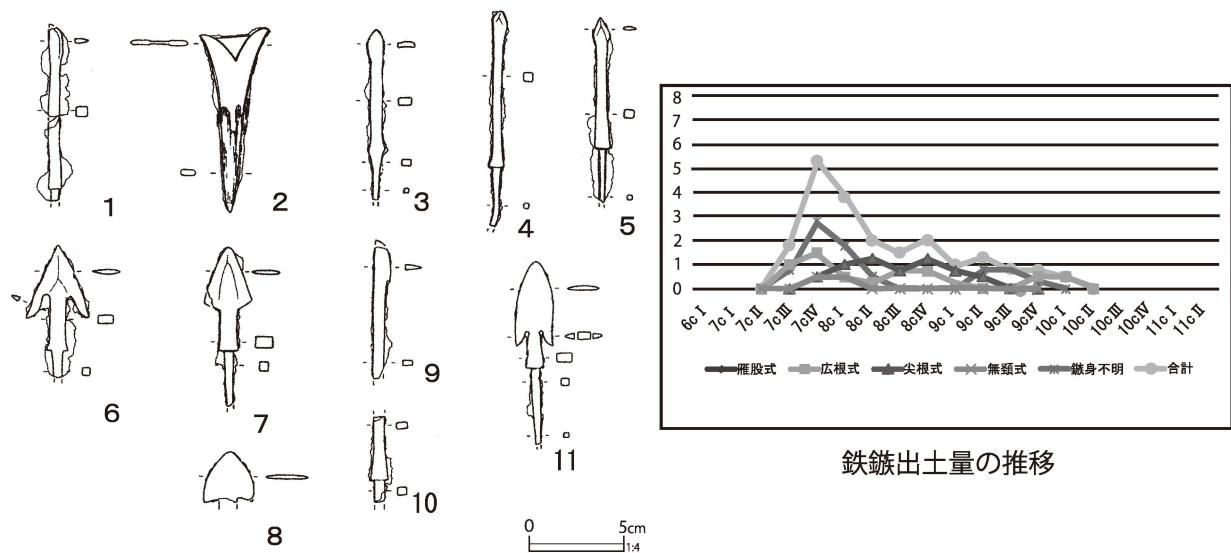
小郡官衙遺跡と類似した出土状況は福岡県太宰府市の大宰府史跡蔵司地区第320号溝跡中層、第2503号溝跡においても認められる(第9図)。時期は7世紀後半に位置付けられており、このような一括での保管状況は他地域では見られず、西海道地域と唐・新羅との対外的な緊張関係による関わりが想定されている(小嶋2011、2014b)。

その一方で、宮城県仙台市の郡山官衙遺跡第I期官衙(陸奥国名取評?、初期の城柵?)や愛媛県松山市の久米官衙遺跡(伊予国久米評)といった同時期の評関連と推定されている遺跡の中には、鉄鏃の出土量が少ない遺跡もみられる。しかし、仙台郡山官衙遺跡第I期官衙では連房式鍛冶工房跡が検出され、小札が出土していることから官営の鍛冶機能を有していたと思われる。

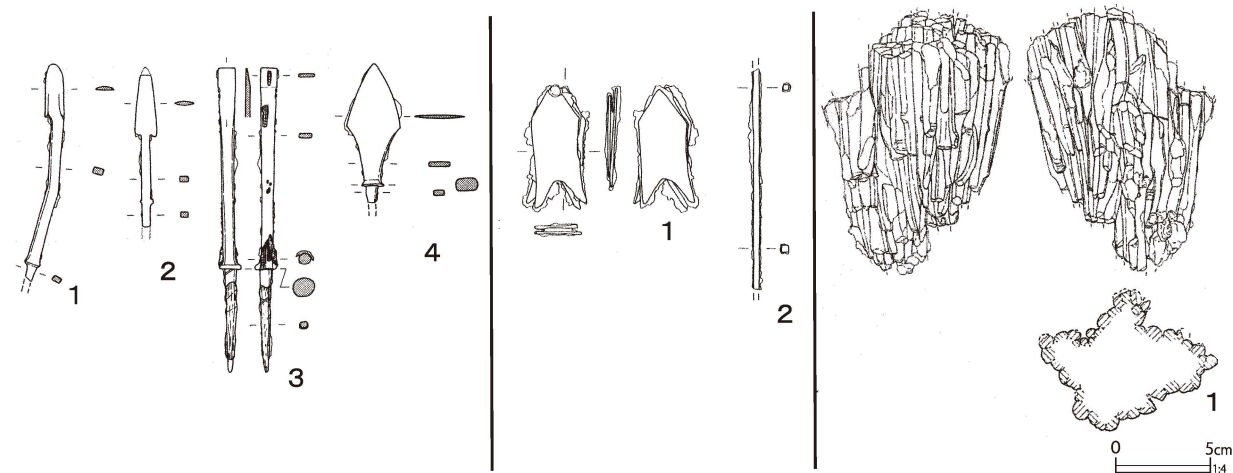
同様に東京都北区の御殿前遺跡(武蔵国豊島評)においても7世紀末頃の連房式鍛冶工房跡が検出



第5図 雁股式 鉄鍬



第6図 熊野遺跡 出土鉄鍬



第7図 日秀西遺跡
第003A号住居跡 出土鉄鍬

第8図 西野原遺跡
第20号住居跡出土鉄鍬

第9図 大宰府史跡蔵司地区
第2503号溝跡出土鉄鍬

され、鉄鏃の出土こそみられないが挂甲の小札が出土している。

福島県郡山市の清水台遺跡（陸奥国阿武隈・安積郡）や茨城県鹿嶋市の春内遺跡、片岡遺跡（常陸国香取郡）においても7世紀後半～末頃の連房式鍛冶工房跡が検出されており、これらも同様の事象の中で捉えられると思われる（安間 2007）。

（2）国家政策と鉄鏃

熊野遺跡や東の上遺跡においては、尖根式が9世紀初頭頃以降に減少していく。その理由のひとつとして、『類聚三代格』延暦十一年（792）六月七日の勅が考えられる。これにより軍団兵士制は陸奥国・出羽国・佐渡国・西海道諸国の辺境要地を除き廃止され、代わって健児の制が布かれた。

鉄鏃の量が陸奥国・出羽国という辺境要地とされて、三十八年戦争の最中であつた城柵遺跡において増加する一方、熊野遺跡などで減少する点から、この政策が尖根式の鉄鏃が減少する契機となったとも考えられよう。

所沢市の東の上遺跡は入間郡に属し、遺跡の性格は東山道武蔵路に伴う駅家である可能性が考えられている（第10図）（根本 2002）。

両幅に溝が掘られた道幅12mの直線道路が検出され、道路の時期は道路側溝の土坑から湖西産の蓋と坏が出土し、7世紀第3四半期頃に比定されている。また、道路遺構1号溝跡の第2層上部の硬化面上面から湖西産の長頸瓶が出土し、7世紀中頃と比定されている。時間差を踏まえても、東山道武蔵路は7世紀後半頃には機能しており、築造時期は7世紀中頃にのぼる可能性もある（註5）。

今回の集成において最も多くの鉄鏃が出土した遺跡であり、赤熊浩一は東の上遺跡において、鉄鏃の出土量が多い傾向にあることを指摘し、「武器を多く集約する遺跡の性格」を想定している（赤熊 2011）。形式としては尖根式が61%と多い傾向にある（第10図 鉄鏃出土量比率）。

出土状況としては、同一遺構からまとめて出

土することはなく、1、2本出土する事例が多い。

また、東の上遺跡では、7世紀末から8世紀初頭頃が出土量のピークであり8世紀前半に鉄鏃の出土量が激減する。その後、9世紀代に入るとさらに減少する状況にある（第10図 鉄鏃出土量の推移）。

酒井清治は東山道武蔵路の性格について「道の築造が、当時の朝鮮半島の緊迫した社会情勢と関連していたと考えたい。おそらく、対新羅、対唐に対応するための軍事的道路であり、一方は内政に目を向けた、北への勢力拡張政策のための道であろう。すなわち、当初は上野国府と武蔵国府を直接結ぶ政治的道路ではなく、東山道と東海道の連絡路である軍事的道路として築造されたと推考したい。」とし、築造当初の東山道武蔵路の性格を軍事的道路と位置付けている（酒井 1993）。

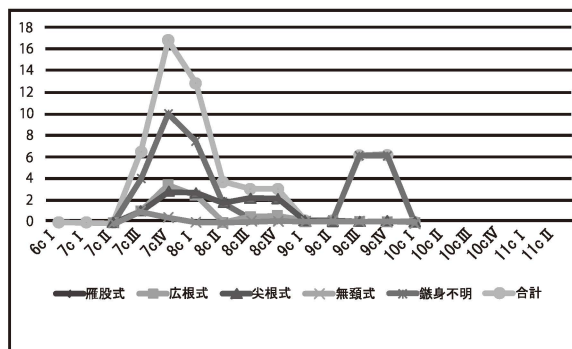
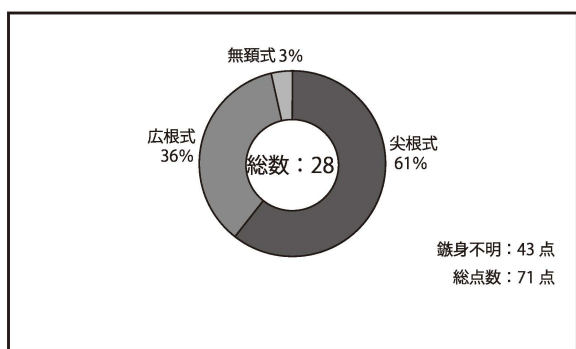
東の上遺跡は鉄鏃出土量のピークが7世紀末から8世紀初頭頃であることから、この軍事的道路としての東山道武蔵路に関わって鉄鏃が多かった可能性が考えられる。その後8世紀代以降に東山道武蔵路の軍事的道路としての役割が薄れていくとともに鉄鏃の量が減少していったとみられる。

また、鉄製品の比率という視点から見ると、鉄鏃の割合が高く、7世紀後半で35%、8世紀後半で41%であるという（赤熊 2011）。

宝亀二年（771）十月二十七日に武蔵国は東山道から東海道に移管され、それとともに東山道武蔵路は官道から間道に降格される。

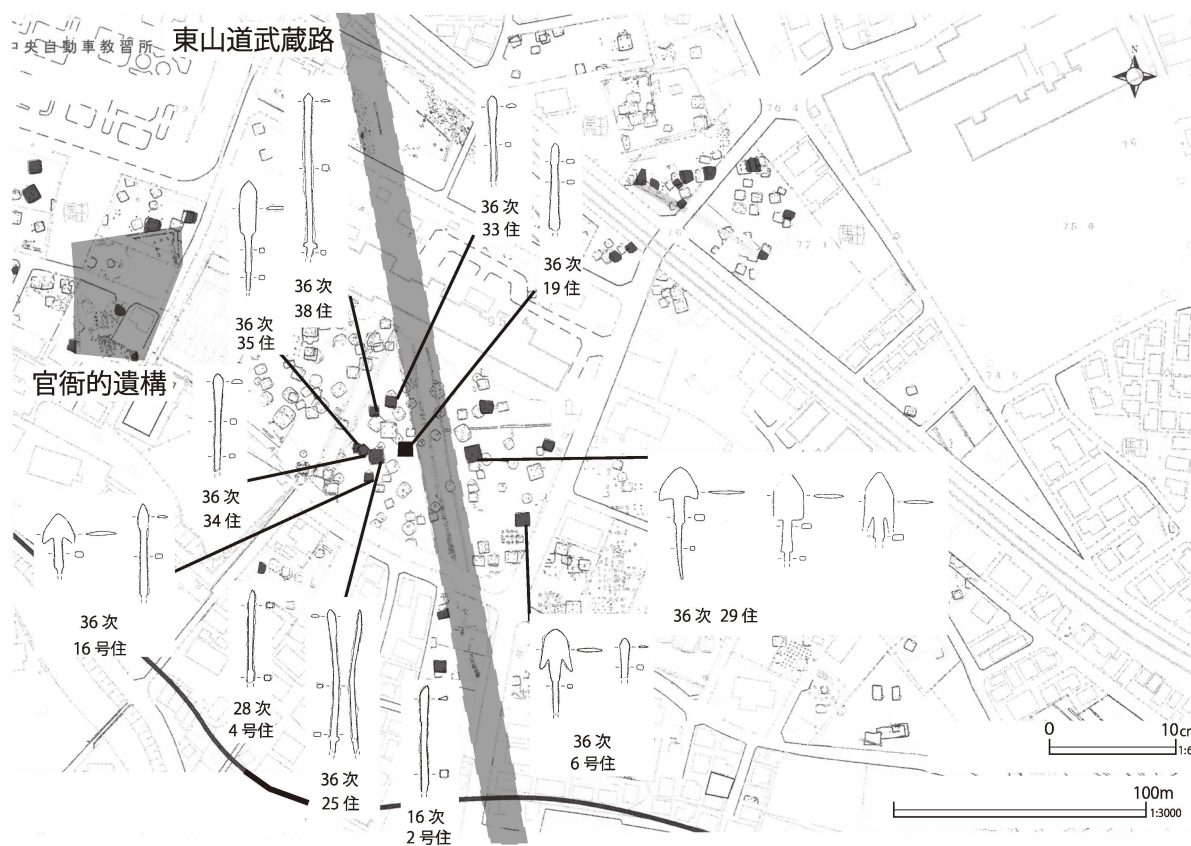
東山道武蔵路自体は官道からの降格後も利用され、天長十年（833）に多摩郡と入間郡の堺に悲田処が設けられているなど一定の需要はあったとみられるが東の上遺跡において、9世紀以降になると鉄鏃の出土量がさらに減少するこの現象は、東山道武蔵路の位置付けの変化に関わる可能性も考えられよう。

東の上遺跡において鉄鏃の出土が多い時期は7世紀末から8世紀初頭頃であり、逆の見方をすれ

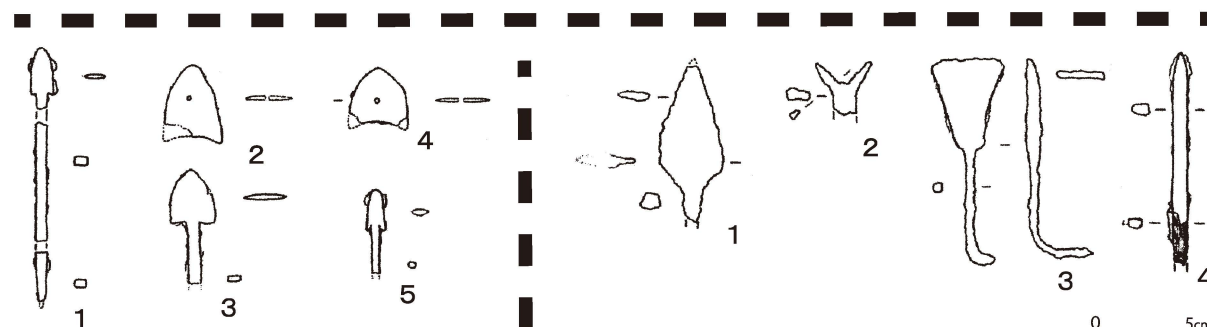


鉄鏃出土量比率

鉄鏃出土量の推移



第10図 東の上遺跡 主な鉄鏃出土遺構



第11図 荒川附遺跡出土鉄鏃

第12図 椿山遺跡出土鉄鏃

ば東山道武蔵路が官道として機能していた時期に鉄鍬の出土が集中しているともいえる。

(3) 軍団兵士制の廃止と鉄鍬の変化

尖根式は7世紀末頃から8世紀末頃にかけて一定量出土しているが鉄鍬全体の出土量が落ち込む8世紀後半頃にも出土量を落としていない。すなわちこの時期には鉄鍬全体の中で尖根式の割合が高くなるといえる。この時期は、軍団兵士制が運用され東国の兵士は防人として西海道、鎮兵として奥羽へと赴任していた。その後、前述のように『類聚三代格』延暦十一年（792）六月七日の勅により、軍団兵士制が廃止され、健児制が布かれ、9世紀以降になるとそれまで出土量が多かった尖根式が減少する。

9世紀前半頃、尖根式が減少していく状況に比例するように広根式と雁股式の出土量が増加し、9世紀後半頃には出土量が逆転する。しかし、10世紀代には尖根式と同様に減少していく。

この現象は、蓮田市に所在する荒川附遺跡と椿山遺跡において顕著にみることができる。

荒川附遺跡は元荒川の右岸側に位置し、遺跡の性格としては、土師器生産と鉄器生産が行われた手工業生産遺跡と位置付けられている（第11図・第14図）。

9世紀代に竪穴住居跡の軒数が減少し、集落の再編から、9世紀後半以降に元荒川対岸の椿山遺跡に主体が移動すると考えられている（寺内1989、富田2007）。

一方の椿山遺跡は、元荒川の左岸側に位置する。前述の荒川附遺跡の竪穴住居跡が9世紀頃に減少し、9世紀後半頃には椿山遺跡に主体が移る。

荒川附遺跡と同様に鉄鍬が定量出土しているが、荒川附遺跡では尖根式が6割近くの出土比率であったのに対して、椿山遺跡では広根式と雁股式が主体となる（第12図・第15図）。

他には、加美郡に所在する将監塚・古井戸遺跡、皂樹原・檜下遺跡においても、8世紀後葉から9

世紀前葉にかけて鉄鍬の出土量が多く、尖根式が主体を占めるといえる。

将監塚・古井戸遺跡は7世紀末から10世紀前半にかけての遺跡であり、出土遺物は帯金具や馬具、小札などの鉄製品、施釉陶器、「厨」や「大家」と記載された墨書土器が出土し、整然と並ぶ掘立柱建物跡が検出されている。

鉄鍬は13点出土しており、遺構外から出土している1点を除き全て竪穴住居跡から出土している。8世紀後葉から9世紀前葉を主体とし、尖根式が多い（第16図）。

前述の「厨」や「大家」と記載された墨書土器や、規格的に並ぶ掘立柱建物跡とともに、尖根式の鉄鍬が多いという様相からも公的施設と考えることができよう。

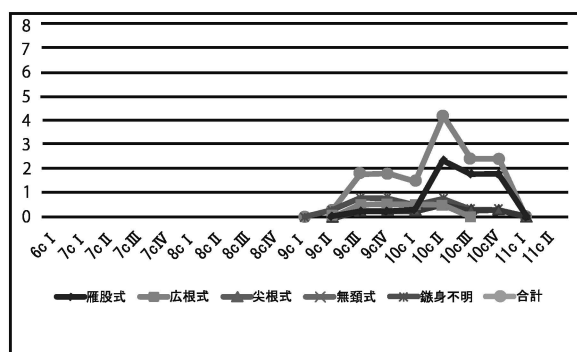
また、皂樹原遺跡・檜下遺跡は、将監塚・古井戸遺跡の西約2kmに位置する。遺跡は神流川の東に位置する扇状地上に立地し、各所に埋没谷が確認されている。この埋没谷により画され、それぞれの単位でグループを構成しているとされている。

鉄鍬は9点出土しており、全て竪穴住居跡から出土している。尖根式が4点、広根式と無頸式が各1点、鍬身不明のものが3点出土している（第17図）。

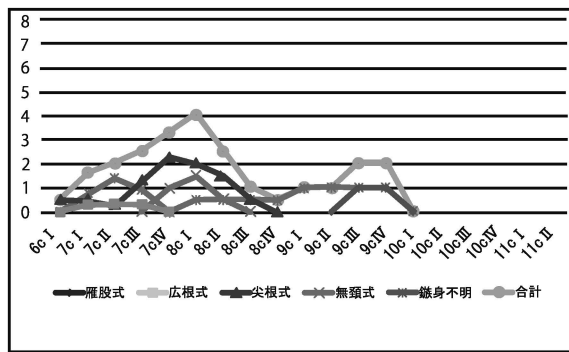
児玉郡神川町に所在する中堀遺跡では、溝跡や道路によって区画され、それぞれの区画ごとに性格の異なる遺構の様相がみられる。

遺物は貿易陶磁器や緑釉陶器、灰釉陶器が大量に出土するなどの特徴を有する。鉄製品としては、18号住居跡から鍬先5枚、鎌2枚、鉄槌1個、鉄鉗2個がまとまって出土しており、保管状況を示す好例といえるだろう。鉄鍬は竪穴住居跡や土坑、溝跡から出土しているが、一括出土の事例はみられない。時期は9世紀後葉から10世紀前葉頃にみられた（第18図）。

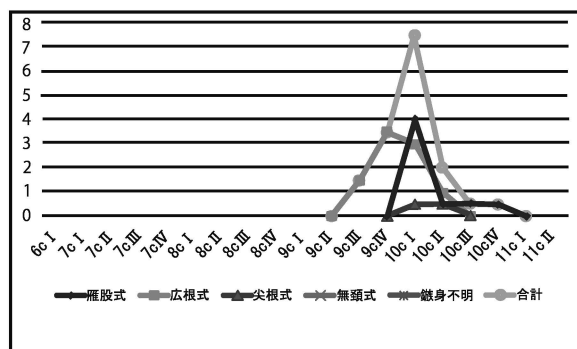
この遺跡の性格は「承和・天長年間に設置された武蔵国勅旨田の経営拠点」とされている（田中・末木1997）。



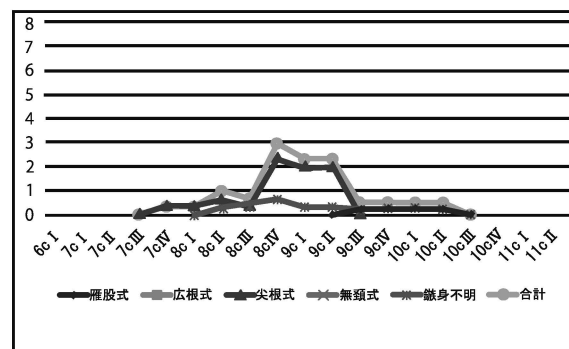
第 13 図 氷川神社東遺跡 鉄鏃出土量の推移



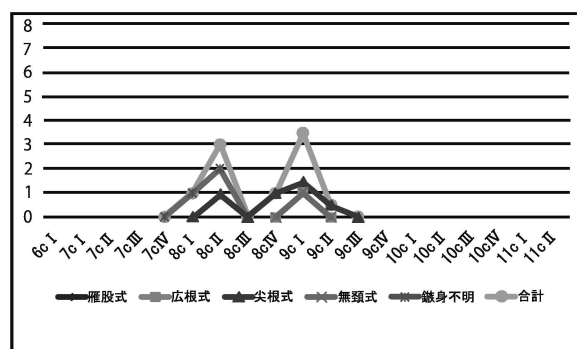
第 14 図 荒川附遺跡 鉄鏃出土量の推移



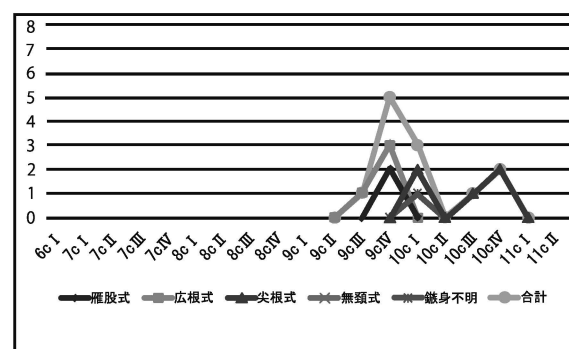
第 15 図 椿山遺跡 鉄鏃出土量の推移



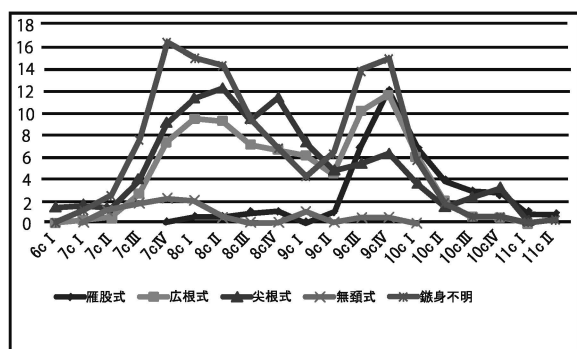
第 16 図 将監塚・古井戸遺跡 鉄鏃出土量の推移



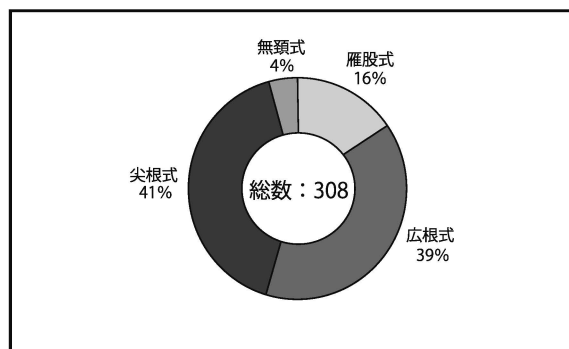
第 17 図 皂樹原・檜下遺跡 鉄鏃出土量の推移



第 18 図 中堀遺跡 鉄鏃出土量の推移



第 19 図 埼玉県内の遺跡 鉄鏃出土量の推移



第 20 図 埼玉県内の遺跡 鉄鏃出土量比率

中堀遺跡においては、尖根式の出土もみられるが、主体は広根式となる。将監塚・古井戸遺跡においては尖根式が主体であったのに対し、中堀遺跡では広根式の量も増加していく。時期や遺跡の性格の違いが鉄鏃の形式の違いに反映されているとみられる。

また深谷市榛沢に所在する大寄遺跡や宮西遺跡からは 10 世紀後半から 11 世紀にかけての鉄鏃が出土しており、この時期には製鉄が行われる。その後、小山川上流 2.5km 地点の浅見山丘陵に位置する大久保山遺跡において、それを引き継ぐように 11 世紀前半から製鉄が開始される（末木 2015）。

神奈川県横浜市に所在する西ノ谷遺跡では 10 世紀後半から 11 世紀後半にかけての鍛冶工房が営まれていた。なかでも小札や鉄鏃の数が多く、またこれらの鉄製品は鋼から一貫製作されており、東国武士に関わる武器・武具の生産工房と想定されている（坂本 1998、坂本・伊藤・齊藤・國平・津野 1997）。

古代末から中世にかけて、武士が台頭していくとともに戦が増加していくことから、武器として鉄鏃の需要も増えると考えられる。しかし 10 世紀代以降、鉄鏃の絶対数は減少していく。

時代が降ると鉄を再資源化する技術が向上するからか、鉄鏃に限らず他の鉄製品の出土量も決して多くはなくなる。また、その他の要因としては古代の段階において鉄鏃の出土した遺構の 70% 近くが竪穴住居跡であったのに対し、その竪穴住居跡が消滅するという点も出土量が減少する要因の一つといえるだろう。

軍団兵士制の廃止や征夷戦争の終了によって、国家主導による管理が行われなくなると、それまで集落においても使用されていた尖根式の鉄鏃が減少していき、広根式や雁股式の鉄鏃が尖根式の鉄鏃の役割を補完していくようになる。

おわりに

以上、鉄鏃は国家政策によって出土量が増減する可能性が想定でき、時期ごとの出土量と歴史的な背景について考察を試みた。

その結果、時期による変遷から鉄鏃、特に尖根式の征矢は国家政策による影響が反映されやすい傾向がみられる。

軍団兵士制の廃止や征夷戦争の終了によって、国家主導による管理が行われなくなり、尖根式の鉄鏃が減少していく。その後比率的には、広根式と雁股式が増加していくが、鉄鏃の絶対数自体が減っていく。

その後、武士の台頭とともに全国的に戦が増えることから鉄鏃の需要も増えると考えられるが、遺物としての出土量は減少していく。

出土した遺物は、その遺跡において製作・使用・保管・修理・廃棄（紛失）といった状況の中にあっただといえる。なかでも鉄製品の場合は鉄素材としての再資源化という流れから離脱したものともいえる。

鉄の再資源化技術が向上するとともに、鉄製品が再資源化の流れから離脱することが少なくなり、その結果として、古代段階においては鉄鏃の出土量などから歴史的背景が臆気ながら読み取れたものが、古代末以降になると実態が不明瞭になっていってしまう。

本稿では、出土量の変化からの考察に終始してしまい、遺構ごとによる性格からの検討を行えなかった。特に鍛冶関連遺構からの出土状況は生産や修理、再資源化に関わる重要な意味を持つものといえる。その点に触れられなかった点は心残りである。今後の課題としておきたい。

註

註 1 集成は現状で不完全なものであり、多々遺漏があることを記しておく。

註 2 第 19・20 号住居跡からは雁股式が 4 点出土している。遺物が混在しており、判然としないが小鍛冶炉

が検出されていることから、再資源化目的で持ち込まれていた可能性がある。

註3 桃生城を侵した蝦夷に対し、宝亀五年（774）に紀広純や大伴駿河麻呂が派遣されて行われた征討から、弘仁二年（811）の文室綿麻呂による幣伊村征討までの時期を指す。

註4 但し、破片資料が多く、再資源化などを目的に鍛冶

工房に集められたものとみられる。

註5 後藤建一は7世紀第3四半期でも7世紀中頃に近い時期を想定しているのに対して、鈴木敏則は7世紀第3四半期末から7世紀第4四半期前半に位置付けており、7世紀第3四半期を中心にやや前後する（後藤 2015、鈴木 2001）。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 2011 「埼玉県の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会 2011 年度栃木大会 研究発表資料集』 pp.538-551
- 安間拓巳 2007 「第二章 古代鍛冶遺跡と鉄器生産の諸相」『日本古代鉄器生産の考古学的研究』 pp.19-71 溪水社
- 池田敏宏・津野 仁 2011 「関東地方の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会 2011 年度栃木大会 研究発表資料集』 pp.377-382
- 川合正一 2005 「茨城県鹿の子C遺跡についての覚書—国衙工房における武器生産を中心として—」『古代東国の考古学』大金宣亮氏追悼論文集刊行会 pp.238-249
- 清藤一順・上野純司編 1980 『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』財団法人千葉県文化財センター
- 黒澤彰哉 2013 「常陸国衙工房の様相—鹿の子C遺跡の再検討をもとに—」『婆良岐考古』第35号 pp.73-99
- 劔持和夫 2009 「神矢考—反町遺跡祭祀跡に見る古代歩射神事—」『研究紀要』第24号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.87-126
- 小嶋 篤 2011 「大宰府の兵器 —大宰府史跡蔵司地区出土の被熱遺物—」『九州歴史資料館 研究論集』36 pp.57-72
- 小嶋 篤 2014a 「小郡官衙遺跡出土鉄鏃の研究」『九州歴史資料館 研究論集』39 pp.35-54
- 小嶋 篤 2014b 「大宰府の兵器」『第10回 古代武器研究会 発表資料集』 pp.69-86
- 後藤建一 2015 「第7章 7, 8世紀の流通構造」『遠江湖西窯跡群の研究』 pp.307-359 六一書房
- 酒井清治 1993 「武蔵国内の東山道について —特に古代遺跡との関連から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 pp.165-194
- 坂本 彰 1998 「東国武士の装備工場を掘る—横浜市西ノ谷遺跡の調査成果—」『特別展 兵の時代 古代末の東国社会』横浜市歴史博物館 pp.117-133
- 坂本 彰・伊藤薫・齊藤孝正・國平健三・津野 仁編 1997 『西ノ谷遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 23
- 末木啓介編 2015 『中世黎明—時代を変えた武士と民衆—』埼玉県立嵐山史跡の博物館
- 鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 東海土器研究会 pp.141-171
- 関 義則 1993 「(3) 雁股鏃について」山形洋一・渡辺正人・佐藤幸恵・笹森紀己子・宮崎由利江・関義則・石井葉子・林宏一・小池裕子編『氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B—17号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第42集
- 田中広明・末木啓介編 1997 『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
- 谷藤保彦・小林徹・田村邦彦編 2010 『西野原遺跡（5）（7）第2分冊—飛鳥・平安時代以降編—』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第489集
- 種石 悠 2014 「第4章 古代狩猟の実態と民族考古学」『古代食料獲得の考古学』ものが語る歴史31 pp.151-211 同成社

- 寺内正明編 1989 『荒川附遺跡 一第6次調査一』埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書 第4集
- 富田和夫編 2007 『荒川附遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第338集
- 富田和夫 2009 「5反町遺跡第1・2号祭祀跡をめぐって」 福田聖・赤熊浩一編『反町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第361集 pp.392-408
- 根本 靖 2002 「所沢市東の上遺跡の性格についてー「官衙的遺構」を中心にしてー」『埼玉考古』第37号 pp.87-99
- 服部敬史 1998 「八王子市船田遺跡出土の鉄鏃について」『郷土資料館研究紀要 八王子の歴史と文化』第10号 八王子市郷土資料館 pp.57-65
- 平林将信・及川司・志村博編 1982 『東平』西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書
- 松崎元樹 2005 「2 船田遺跡出土の鉄器について」原川雄二・福嶋宗人・松崎元樹・並木仁編『八王子市船田遺跡ー都営長房団地立替工事事業に伴う第Ⅲ次調査一』東京都埋蔵文化財センター調査報告第161集 pp.375-381
- 松村恵司 1991 「古代集落と鉄器所有」『日本村落史講座 4 政治Ⅰ原始古代中世』pp.92-114 雄山閣
- 渡邊理伊知 2015 「城柵遺跡における鉄鏃について」『宮城考古学』第17号 pp.99-116
- 渡邊理伊知 2016 「鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察 ー埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心にー」『研究紀要』第30号 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.163-180

集成資料出典（※渡邊 2016 に記載した出典は除く）

- 90：上尾市教育委員会 1996 『尾山台ー尾山台遺跡発掘調査報告書一』上尾市史編さん調査報告書 第10集
- 91：荒川正夫 1999 『大久保山Ⅶ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告 7
- 92：磯野治司・吉見昭 1998 『丸山遺跡 宮岡遺跡第2次』北本市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 93：大久保卓 2012 『高倉寺前遺跡』入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書 第23集
- 94：大宮市教育委員会 1988 『市内遺跡群発掘調査報告 馬宮遺跡群 宮ヶ谷塔貝塚』大宮市文化財調査報告第25集
- 95：大宮市教育委員会 1992 『市内遺跡発掘調査報告 Cー1号遺跡ー第3次調査一』大宮市文化財調査報告第31集
- 96：大宮市教育委員会 1993 『市内遺跡発掘調査報告 根切遺跡（Cー1号遺跡）ー第4次調査一』大宮市文化財調査報告第32集
- 97：大宮市教育委員会 1994 『市内遺跡発掘調査報告 根切遺跡（第2次調査）Cー108号遺跡（第2次調査）』大宮市文化財調査報告第35集
- 98：岡田賢治 2008 『牛東北遺跡 第1次発掘調査報告書』川越市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集
- 99：荻野将盛 2002 『八幡前・若宮遺跡（第2次調査）川越市遺跡調査会調査報告書第24集
- 100：越智俊夫・中野達也 2015 『浜川戸遺跡 34次地点』春日部市埋蔵文化財調査報告書第18集
- 101：越智俊夫・中野達也・鬼塚知典 2014 『八木崎遺跡 5次地点』春日部市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 102：加須市遺跡調査会 1983 『花崎遺跡』加須市遺跡調査会報告書第1集
- 103：加藤晃・中野達也・実松幸男・高澤研介 1999 『小淵山下北遺跡 八木崎遺跡2次 花積内谷耕地遺跡5次』春日部市埋蔵文化財調査報告書 第8集
- 104：川越市教育委員会 1956 『川越市仙波古代集落跡発掘報告書』川越市教育委員会
- 105：川越市教育委員会 1989 『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅸ）』川越市教育委員会
- 106：小林寛子 2004 『八王子浅間神社遺跡（第8次調査）』さいたま市遺跡調査会報告書第36集
- 107：小宮山克己 2007 『領家・宮下遺跡 ー第1～3次調査ー 第1分冊』上尾市文化財調査報告 第82集
- 108：小宮山克己 2009 『領家・宮下遺跡 ー第1～3次調査ー 第2分冊』上尾市文化財調査報告 第89集

- 109：埼玉大学考古学研究会 1978 『城ノ越遺跡』城ノ越遺跡調査会
- 110：坂戸市遺跡発掘調査団 1989 『若葉台遺跡 一若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅰ一』
- 111：坂戸市遺跡発掘調査団 1993 『若葉台遺跡 一若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅱ一』
- 112：坂戸市教育委員会 1981 『勝呂廃寺』坂戸市勝呂廃寺跡範囲確認調査概報
- 113：狭山市遺跡調査会 1994 『稲荷上遺跡』狭山市遺跡調査会報告 第6集
- 114：狭山市教育委員会 1986 『狭山市埋蔵文化財調査報告書4 揚櫨木遺跡』狭山市文化財報告 12
- 115：狭山市教育委員会 1987 『狭山市埋蔵文化財調査報告書5 今宿遺跡』狭山市文化財報告 13
- 116：狭山市史編さん係 1983 『狭山市遺跡分布調査報告書 第1集』狭山市史編さん調査報告書 12
- 117：寺社下博 2000 『一本木前遺跡』平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 118：寺社下博 2001 『一本木前遺跡Ⅱ』平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 119：照林敏郎・斉藤純 2015 『西久保・宮山遺跡第7・8地点発掘調査報告書』朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書第43集
- 120：富元久美子 2005 『八幡前・若宮遺跡（第1次調査）』川越市遺跡調査会調査報告書第31集
- 121：中野達也・越智俊夫・実松幸男 2005 『浜川戸遺跡1.2.3.4次調査地点』春日部市埋蔵文化財調査報告書第14集
- 122：中野達也・鬼塚知典・越智俊夫・森山高 2007 『貝の内遺跡2.20.21.22.23.24地点小湊山下遺跡第4次地点』春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集
- 123：中野達也・鬼塚知典・越智俊夫・森山高 2009 『貝の内遺跡26次地点』春日部市埋蔵文化財調査報告書第9集
- 124：中野達也・鬼塚知典・森山高・越智俊夫 2010 『貝の内遺跡8.13.18次地点 陣屋遺跡8次地点 中屋敷遺跡1次地点』春日部市埋蔵文化財調査報告書第10集
- 125：野村侃司・赤石光資 1981 『氷川遺跡 一第1・2次調査一』氷川遺跡調査会
- 126：東下川原遺跡調査団 1995 『川越市東下川原遺跡発掘調査報告書』
- 127：平野寛之 2014 『市内遺跡Ⅱ』川越市遺跡調査会調査報告書 第44集
- 128：藤沼昌泰・小川真 2009 『宮ノ脇遺跡 第1次発掘調査報告書』宮ノ脇遺跡発掘調査会
- 129：森田安彦 2012 『王子西遺跡Ⅱ』平成23年度熊谷市王子西遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書
- 130：安井智幸 2005 『森ノ上遺跡』埼玉県狭山市遺跡調査会報告書 第14集
- 131：山田尚友 2005 『白楸宮腰遺跡（第5次）』さいたま市遺跡調査会報告書 第44集
- 132：山田尚友 2008 『大久保領家遺跡（第9次）』さいたま市遺跡調査会報告書 第71集

図版出典

第1図：筆者作成、図2-1大久保（2012）第10図より、第2図2～7：大久保（2012）第9図より、第3図：服部（1998）第1図より、第4図：平林・及川・志村編（1982）第110図より、第5図1：福田・赤熊（2009）第206図より、第5図2：山本（1991）第37図より、第5図：3赤熊・井上・岩瀬・富田（1988）第107図より、第5図4：山形・渡辺・佐藤・笹森・宮崎・関・石井・林・小池（1993）第188図より、第6図：富田和夫（2002）第45・52・91・93・111・164・314・362・369図より、第7図：清藤・上野編（1980）第41・42図より、第8図：谷藤・小林・田村編（2010）第185図より、第9図：小嶋（2014b）第1図より、第10図：根本（2010）第8図・第35図-20・第70図-14・第125図-45・46・第143図-33・34・第153図-18・第157図-32・第166図-62・63・64・第178図-26・第181図-15・第182図-7・第184図-6より、第11図：木戸・西井（1992）第14・115・168図より、第12図：大塚・寺内・小島（1989）第256図より